

自体満足

昔々、ある村に、大変仲の悪いパン屋さん（A店・B店）がありました。

ある日、A店に王様がやってきて、次のように言いました。

「ワシはお前に何でも望むものをやろう。家だろうが、金だろうが、宝石だろうが、何でもだ」
パン屋さん、喜んだのなんの・・・

「王様、有り難うございます。本当に何でもいいんですか」

「ウン、何でもいいぞ」と、答えた王様、続けて言うのです。

「ただしな、お前に与えたものの倍ほど、向こうのパン屋にやるぞ」

それを聞いたパン屋さん、「エッ、エー・・・」と言うなり頭を抱え込んでしまいました。

いくら自分が王様から望みのものを貰ったとしても、あの仲の悪いパン屋が、その倍もらうのですから、手放しで喜んでおれません。

そこでパン屋さん、考えに考えた末、こう言いました。

「王様、私の片目を潰^{つぶ}して下さい」

以上のようなお話です。

ここまで極端なことはありませんが、私たちは、時としておかしな発想をするものです。

これは人間の世界が、相対の世界だということに原因しています。

相対の世界とは、他と比較することによって価値を決める世界です。もちろん幸・不幸もその例外ではありません。

ですから、このパン屋さんのように、いくら自分が幸せになっても、仲の悪いパン屋が、自分以上に幸せになってしまうと、もうそれだけでこちらは不幸になるのです。

逆に、自分が不幸（片目が潰れる）になっても、相手がそれ以上に不幸（両目が潰れる）になれば、それで満足できるのです。

比較の世界ですから、相手が自分以上に不幸であれば、自分の不幸はいくらでも耐えられるというわけです。

まことにおかしな理屈ですが、これが相対の世界の「価値観（ものさし）」です。

こうして私たちは、絶えず周りと比べては、羨んだり、妬んだり、蔑んだり、自慢したりと、一喜一憂しながらこの人生を歩んでいるのです。

そんな私たちに向かって、「他と比べる必要などありません。あなたは、あなたのままでいいですよ」と、ありのままの私を受け入れて下さるお方が阿弥陀如来という仏さまなのです。

阿弥陀さまは、私たちに決して「ああなれ」「こうなれ」という条件をつけません。

私たち一人一人を、かけがえのない「いのち」を抱えた、尊い存在として無条件に受け入れて下さるのです。

それは、絶対的な受け入れ、絶対的肯定のお心です。

この阿弥陀さまのお心（大悲心）に出遭う時、「ああ、そうだった、そうだった。私は私でよかったんだ。周りと比べる必要などなかったんだ」と、私にうなづくことの出来る世界が開かれるのです。

これを、「自体満足」と言います。

北海道のお寺の坊守さんで、癌のため四十七歳で亡くなられた鈴木章子さんという方がおられます。病床でお念仏に生かされた喜びを詩や短文に書き残され、それが一冊の本（『癌告知のあとで』探究社発行）になって世に出されました。

その彼女の詩や文章を読ませて頂くと、お念仏の世界は自体満足の世界だということがよく分かります。

次の詩は、亡くなる三ヶ月前に書かれたもので、四人の子供さんに宛てた詩です。

満 足

隣の人より一歩手前
そんな刹那的の人生を
子供達よ
過ごしてくれるな
どこまでいっても
満足などない
競うことなく
比べることなく
うらやむことなく
嘆くことなく
卑下することなく
あなたの花を咲かせておくれ
おまえはおまえで充分
あの庭のバラのように
あの庭の松のように
人間成就の花を咲かせておくれ

「他と比べる必要はありません。自分の花を咲かせるのですよ。お前はお前で充分なんだから」と、我が子に語りかける彼女の心は、まさに阿弥陀さまから賜った大悲の心です。

続いて死の一ヶ月前の文章です。

『お母さんは今日か明日、死ぬような気がする。みんな大丈夫かい。覚悟はいいね。お母さんは今死んでもうれしいよ。良いことをしたとか、悪いことをしたとか、成功したとか、成功しなかったとか、そんなことじゃない。満足したかどうかということ。お母さんは十分満足したよ』

かけがえのない「いのち」を頂き、一度きりの人生を歩む私たちですが、果たして彼女のように、「十分満足した」と心の底から頷けるような人生を送っているのでしょうか。

そうして絶筆です。

念仏は
私に
ただ今の身を
納得して
いただいてゆく力を
与えて下さる

これらの詩や文章を通して、お念仏が私たちの人生に何を与えて下さるのかよく分かります。

それは、いかなる境遇にあらうとも「私はこれでよかったです。私は満足です」と言いながら、自分の人生を刻々と生き、そして死んでいくことの出来る、そういう世界を与えて下さるもの、それがお念仏なのです。

平成19年6月 「光明寺だより51号」より